



「半分の月がのぼる空」
二次創作



不思議の国のアリス

文風 冴月

「不思議の国のアリスをやるの」

誰もが知っているだろう作品の名前を耳にして、僕はちょっと身構えた。

六時間目が自習だったため、その時間中ずっと、僕はのんびりと読書をしていた。昨日から読み始めた、シャーリィ・ジャクソンの『ずっとお城で暮らしてる』を読み終えたのだった。そのせいもあってか、なんだか『不思議の国のアリス』に怖いイメージが浮かんだのだ。

「演劇ってこと？」

僕はありきたりな返答しかできず、並んで歩く少女の顔を見る。黒く長い髪の毛が夕陽の橙に染まり、風に揺れているのが楽しそうだ。

「うん」

少し得意げに笑って、里香は僕を見た。

「裕一のクラスはなにをやるの？ 三年生なんだし、派手にやるのかな」

里香は無邪気な笑みを向けてくる。目を閉じて考える。僕のクラスの出し物……。確か昨日のLHRで決まっていたような、まだ決まっていなかったような。

「覚えてないの？」

不思議そうな目で僕を見つめる里香。

「いや、その」

しどろもどろになってしまう。

「どうせまた、ぼーーーーーっとしてたんでしょう？」

「またってなんだよ、またって」

僕はそう苦笑いしながら答えた。

唇を尖らせたままの里香が、表情は柔らかく笑って、僕の手を取った。周りを見ると学校の生徒の姿は見えない。里香のほっそりとした指が、僕の指に絡まる。少しだけひんやりしていた。

里香の爪はきれいだ。

病院にいた頃は伸ばすことすら許されなかったのだから、いっそのこと周りの女の子みたいにおしゃれすればいいのに。

短く切りそろえられたつるつと丸い指の爪を見ながら、僕はそんなことを考える。

昨日の会議をぼんやりと思い出す。

文化祭の出し物を決める会議はクラス長や文化委員会（文化祭関係の仕事をするのだ）を中心にして行われる。だから、そのときも僕はのんびりと本を読んでいたのだ。

「『ずっとお城で暮らしてる』を読んでいたのかもなあ」

「ふーん」

「信じてないな」

「そんなことはないけど……ねえ、それってどんなお話なの」

里香の影響で、僕もそれなりに本を読む習慣がついてきた。はやいときには二日で一冊を読むペースにまで成長したのだった。

「ううん、なんて説明したらいいのかな」

「あはは、裕一は相変わらずだね」

読む習慣はついてきたけれど、読んだ本の内容や感想を自分の言葉にして説明するのが、苦手だった。うまく話そうとすると余計に遠回りの説明になり、簡潔にまとめたつもりが全然伝わっていない、なんてことばかりなのだ。

「怖い話、かな」

「ホラーなの？」

「幽霊が出てくるわけじゃないんだけど。なんとというか、人間的な怖さっていうのか……」

僕はそこでまた口をつぐんでしまう。

「人間的な怖さ、か……」

「幽霊よりも、生きてる人間のほうが怖いってことさ」

きっと作者はそんなことを伝えたかったんじゃない。でも、僕みたいな人間の読んだ感想なんて、そんなものだ。

里香はそれでもなにかが少しわかったような顔をして、じゃあ、今度貸して、と言った。

「貸すのは構わないけど。それはいいとして、さっきの、不思議の国のアリスをやるって」

「ああ、そう。そうなの」

『不思議の国のアリス』はルイス・キャロルの作品で、名作の中の名作だろう。といっても、僕はまだ読んでことがないのだけれど。

満面の笑みで、里香が口を開く。

「聞いて、裕一。あたしね、アリス役を貰ったの！」

夏に咲く向日葵みたいに、里香の笑顔がはじける。その表情だけで僕の頬もゆるんでしまう。

うん？

里香は今、なんて言った？

「アリス役？」

「そうなの！ クラスのみんなが、絶対にあたしがやるといって」

確かに里香ほどの美少女がアリス役だなんて、考えるだけでもよだれが垂れてきそうな――。

「エッチな顔してる」

じっと僕を見つめる里香。

「ち、ちがうって！」

「ふーんだ。また変な想像でもしていたんでしょう」

「またって、なんだよ！ またって！」

「べっつに一」

しかし。

しかし、である。

里香のアリス姿かあ……。

フリルのついたドレスを着た里香の姿を思い浮かべる。アリスってことは、薄い青地に白いエプロンのような格好だったっけ。

「アリス……里香がアリスねえ……」

「なによ、文句でもあるの」

「いや、ちがうって。アリスの衣装を里香が着たら、すごく似合うんだろうな、って思ったんだよ」

「そ、そう……」

恥ずかしげに俯く里香が可愛くて、握った右手に力を込める。里香もそれに応じて、握り返してくれる。里香の肘が脇腹に当たる。その感触さえも愛おしくて、僕は少しだけ歩幅を小さくした。

里香に会えなくなった。

文化祭が始まるまで残り一ヶ月。僕も自分のクラスが劇をやるというので小道具なんかの手伝いに忙しい。忙しいのはいい。充実しているって思う。それは別にたいした問題じゃない。

けれど。

里香に会えない。

それが問題だ。

アリス役に決まったときは僕も一緒になって喜んだものだ。けれど、いざ文化祭が迫り、練習が本格化すると里香は、

「台詞の量が多いし、なによりクラスのみんながすごくやる気なの。だから——」

だから、これからは一緒に帰ることができないかも。

それは僕にとって死刑宣告と同じだった。

どれだけ一日の授業に疲れようとも、放課後に里香と並んで歩く帰り道のことを思えば乗り切れたのだ。

なのに。

それなのに、だ。

里香に会えない。

僕は頭を抱えて悩んだ。

そんなある日、昼休みに里香が僕の教室にやってきた。もしかして一緒にお弁当でも食べようというのか。期待に胸を膨らませた、膨らませ過ぎて破裂しそうだった。

「今日ね、一緒に帰ろう、裕一」

その言葉に胸が破裂するかと思ったけれど、僕はなんとか踏みとどまった。最近は帰りだけでなく、昼休みすらもまともに会えなかったから、里香とこうして会話できているだけでも、本当に嬉しかったのだ。

「どうして泣いてるの？」

「な、泣いてないって！」

必死に否定するけれど、僕の頭に浮かぶのはふたりで並んで帰り道を歩くことばかりだった。

嬉しい！

里香だ！

里香が目の前にいて、こうしてしゃべっている！

だから、里香がそそくさと教室から出て行ったことにも気がつかずにその場に立ち尽くしていたのだ。周りの視線にやっと気がつき、里香が目の前からいなくなっていることを知ったのは、昼休みが終わる五分前のことだった。お弁当を里香と一緒に食べるだなんて、夢のまた

夢だった。

午後の授業はあっという間に過ぎていった。もちろん、授業の内容なんて頭には入っていない。担任からはテストで悪い点を取るたびに、卒業できるようにもっと頑張れ、だなんてお説教を貰うのだけれど。

ただでさえ周りより一年も遅れをとっている僕にとって、その言葉はとても重い。

だけど、今の僕にとっては——いや、これはだいぶ前からなのだけれど——自分の将来よりも里香のほうが大事なのだった。

こんなこと口に出しては言えないけれど、それでもやっぱり、世界で一番、里香のことが大切なのだ。

隣を歩く里香を見る。

黒蜜みたいな長い髪の毛。里香が歩くたびに左右に揺れる。それはメトロノームみたいに、一瞬一瞬を刻んでいく。それが僕にはたまらない。まるで、里香の残りの命を表しているみたいで。心臓の鼓動のように規則正しく、夕日に舞う黒髪が、本当にきれいで、儂くて。

「アリスのほうは順調？」

けれど、口をついて出たのはそんな言葉。

思っていることや考えていることをそのまま口に出すのは、やっぱり難しい。それは里香も同じなのだろうか。それさえも、訊いて確かめることが今の僕にはできない。

「順調だよ。もうすごい。小道具や大道具なんかも凝ってて、衣装だって！」

里香の弾んだ声。あれこれ考えていた自分がばかばかしくなるくらい素敵な声だった。

「だからね、今日はクラスのみんなに言ってお休みを貰ったのよ」

里香の部屋に入るのは久しぶりだった。そもそも里香に会うことすらできなかったこの一ヶ月を思えば当然のことだ。

目につくのは大きな本棚で、そこにはたくさんの本が詰まっている。そのほとんどが里香のお父さんのものらしいけれど、最近では里香自身も、自分が読みたいと思う本を本屋で買っている。

ここに来るたびに僕は思い出してしまう。

初めて、里香の病室に行ったときのことを。真っ白な床に、真っ白な壁。そこに置かれたベッドの上で、真っ白なシーツに埋もれるようにしてこちらを見ていた、あの日の里香を。

飲み物を持って来るから待ってて、と言い残し、里香はドアを閉じた。

残されたのは僕一人。

あのときとは正反対だ。

僕が初めて里香に会ったとき、徹底的に白で埋め尽くされた病室に、取り残されていたのは里香だった。

あれからずいぶんと時間がたったものだ。

こんなことを言うと、きっと里香はまた「ジジくさい」だなんて言うのだろうけど。

あまり他人の部屋を物色するのも悪い。僕は大人しく床に置かれた座布団に腰を下ろす。しかし。

「遅いなあ……」

つい言葉が漏れる。飲み物を取りに行くだけにしては時間がかかっている。もしかして、なにか起きたのだろうか。

少しだけ胸騒ぎがした。

いや。

大丈夫だ。僕は心配症なだけだ。里香にいつも言われているじゃないか。

そう自分に言い聞かせる。

時計の秒針が進む音だけが聞こえる。

「ちょっと、見に行くだけなら……」

誰に説明するわけでもないのに、そう言って僕は部屋を出た。廊下に里香の姿はない。飲み物ということは台所だろう。

里香のお母さんはまだ帰ってきてはいないから、家の中には僕と里香しかいないはずだ。それにしてもやけに静かだった。

台所のテーブルの上には、コップが二つ用意されていた。どちらも空のまま。

どういうことだろう。里香はどこに行ってしまったのだろうか。

そのとき、奥の部屋から物音がした。

そこは確か里香のお父さんの部屋だ。何度か入れて貰ったことがある。近づくと確かに中からは音がしていた。きっと里香だろう。

何気なく、そう、本当になにも考えずに僕は、里香のお父さんの部屋の扉に手をかけた。

きっと里香に会いたかっただけなんだ。そう言い訳してみても、それは後の祭りだ。

扉を勢いよく開けた僕はそのままの格好で止まってしまった。

中には里香がいた。

そう、里香がいたのだ。

正確には着替え中の里香が……。

その里香と、目があった。

流れるような黒い髪が広がり、彼女の細い体を包む。それは一瞬のことだったけれど、僕たちのあいだには永遠のような沈黙が下りる。

華奢な里香の体。雪の中から現れた妖精のような、純白の肌。触れたら壊れてしまいそうなほど細い腕に、慎ましやかな胸を包む淡い水色のブラジャーが映える。

両手で掴んでいた青色のドレス（きっとアリスの衣装だろう）で慌てて胸元を隠す里香。

縦に伸びる可愛らしいおへそが、抱き寄せた衣装の隙間から見えた。

「な、なな……！」

里香の顔が真っ赤に染まった。口をぱくぱくさせて、なにかを言おうとして開き、また閉じて、を繰り返す。

上半身を隠すドレスの下から、里香の穿いたドロワーズがのぞく。里香の肌のように白い。膝

を隠すドロワーズの裾は、澄んだ青のリボンで結ばれている。

僕はすべてのものから目を離すことができなかった。驚きもあるけど、純粹に、里香のもつ美しさのせいだ。

声にならない悲鳴を上げて、こちらに背を向けた里香は、

「さ、さっさと……で、出ていきなさいよバカ裕一！」

と怒鳴った。ばさばさと揺れる黒髪のおかげから、ドロワーズに包まれた小振りなお尻が、ちらちら見えるのが心臓に悪い。

「ご、ごめん！」

そうとしか言えなかった。僕はそそくさと部屋の扉を閉めた。

閉めた後も心臓がばくばく脈打っていて、壊れてしまいそうだった。

数秒前の里香の姿が頭に蘇ってくる。

細く白い手足。

長く、つやのある黒髪。

羞恥に染まった里香の可愛らしい顔。

その他諸々、あんな場所やこんな場所を見てしまった記憶が、ものすごい速度で瞼の奥に浮かんで消えた。

そのまま里香の部屋に行くのもなんというか、なんとも言えない感じがしたので台所で待つことにした。しばらくすると足音が聞こえて、里香が現れた。

「どうかな？」

はにかんだ表情で、里香が尋ねる。

アリスのドレスに身を包んだ里香が、いや、アリスがそこにいた。

まだ少し顔が赤いようだ。もしかしたら、アリスの衣装を着ているせいもあるのかもしれない。

僕はまじまじと里香の姿を見つめる。

澄み切った青空のようなドレスの上に、清潔感のある白いエプロンを着ている里香。

アリスは金髪だろうけれど、里香の黒髪もすごくマッチしていいと思う。頭にはタンポポのヘアピンまでくっついている。

この姿の里香が舞台に立つのか……。

「すごくいい！」

そう思うと、僕は思わず叫んでいた。

「本当？」

「ああ、とってもいいと思うよ！」

「そ、そうなんだ……」

薄桃色に頬を染め、きゅっと握り締めた手を胸に当てた里香が、

「ね、裕一」

と、上目づかいに僕を見て、

「……か、可愛い？」

なんて訊いてくる。

可愛いに決まっている。

「か、可愛いよ」

やっぱり、こういうのは照れる。里香も夕焼けの何倍もの赤さになって、照れていた。

そっと里香の細い体を抱き寄せる。すっぽりと僕の腕の中におさまった里香の腕が、背中にまわされる。僕も腕の力を強めて、

「里香……」

最近はずっととっていいほど、会えていなかったんだ。だから……。

だから、今日くらいは大目に見て貰えるんじゃないか。僕はそんなことを考えながら、里香の唇にそっと触れた。

時間はゆったりと過ぎていき、文化祭の前日。校舎内の雰囲気は文化祭ムード一色で、学校全体がどこか浮き足立っているような、そんな感じだった。

悪くない。

心からそう思う。

一年の中でもっとも学校というものを変えてしまうものが文化祭だ。日常を非日常に変えてしまう。そんなイベントなのだろう。

僕のクラスもだいぶ気合が入っている。僕は照明関係の担当だから、たいして責任を負っているわけじゃないのだけど。

他のクラスも明日に迫った文化祭に向けて、どこか気持ちがふわふわと地についていなかった。

だから、だったのだろうか。

普段であればそんな気も起こさなかったのだろう。文化祭前日で、授業もおざなりに行われているようなムードのせいだったのだろう。

そう考えないと、とてもではないけれどやるせない。この世界はそれほどまでに残酷であって欲しくはない。

だけど、それは起きてしまった。

それだけは事実なのだ。

僕は青ざめた里香の顔を見て、そんなことをつらつらと考えていた。

時間はすでに夕方の五時を回っている。

里香のクラスの生徒たちはそれぞれが明日に迫ったアリスの劇の準備に忙しい……はずなのに、今は誰も口を開こうとしない。

事の発端は昼休み。里香が僕のクラスに顔を出したかと思うと、泣きそうな顔でこう言った。

「なくなっちゃった……」

そう言った里香は、貧血でも起こしたみたいに、青ざめた表情をしていた。

「アリスの衣装がなくなっちゃったの……」

どうしよう、なくなっちゃった、どうしよう。

うわ言のようにそう繰り返す里香。一緒に教室に入ってきた里香のクラスメイトに説明を求めると、アリスの衣装がどこを探しても見当たらないのだそうだ。教室の後ろにアリスの劇用の小道具やら衣装やらをまとめて置いてあるらしいのだけれど、四時間目の体育が終わって帰ってきたらアリスの衣装だけがなくなっていたらしい。

里香が衣装を学校から持ち出したのは、僕に披露するために着たあの一回だけだ。今朝も衣装はきちんとしまわれていたらしい。

なのに、それがなくなってしまった。

クラスの生徒の仕業だとは思えない。自分のクラスの出し物が台無しになるのだ。そんなことはしないだろう。

「里香ちゃん、ずっとこの調子だし、クラスの間みんな大騒ぎになっちゃいまして」

自分が悪いわけでもないのに、しょぼんとした口調でその友達が言う。

「里香」

うつむく里香に声をかける。里香はゆっくりと顔を上げるけれど、僕はなんと声をかけてあげたらいいのか、わからなかった。

気にするなよ、もう一回探してみよう、だなんて無責任な台詞を言えるはずがない。里香たちだって精一杯探したはずなのだ。彼女たちの制服のところどころに綿埃がついているのが見えた。

「どうしよう、裕一……このままじゃ、アリスが……」

「落ち着くんだ、里香——」

「だって！ せつかく、みんなで準備してきたのに……こんな、こんなのって、ないよ……」

「里香……」

「里香ちゃん……」

なにを言えばいいのだろう。

なにを言えば、僕の気持ちは里香に伝わるのだろう。

いつもそうだ。

読んだ本の感想を、うまく言葉にできないのと一緒だ。

心の奥底にある、本当に伝えたいものを伝える方法を、僕は知らない。うまく伝わるように、うまく伝えられるように、言葉を必死に選ぶけれど、選んでいるあいだに大切なものはどんどん指の間から落ちていってしまう。僕らはあまりにも考えすぎる。

無情にも五時間目の予鈴が鳴った。里香は泣きそうな顔で、友達に手を引かれて教室を去っていった。

午後は授業がない。明日が文化祭だから、五、六時間目はその準備に使うのだ。もともと限られた時間しかないのはわかっているから、部屋の装飾や看板を取りつけたりなどといった作業が中心となる。

委員会の生徒たちが前に出てそれぞれの役割に指示を飛ばす。心の中で彼らに、そしてクラスの間みんなに謝った。騒がしくなる教室の後ろの扉からこっそり、外に抜け出す。

里香の衣装を探すんだ。

埋め合わせは文化祭の本番でなんとかしなくてはならないだろう。なんだったらクラス全員にジュースをおごったっていい。

気分は隠密行動する兵士のそれで教室から出ると、ちょうど担任に出くわした。ぼったりと。

「どこ行くんだ、戒崎。これから教室内の装飾だろう」

「そ、それが急に段ボールが足りなくなったとかで、ちょっと貫いに行っておようかと！」

「おお、そうか！ 珍しいな、お前から動くなんてな！」

担任は豪快にわはは、と笑うと教室に入っていった。ばれるのも時間の問題だ。僕は急いで廊

下を駆け出した。

探す当てもない。里香たちだって必死に探している最中だろう。

僕は走りながら考える。衣装をどこかにやってしまった犯人のことを。

いったいどこの誰なのだろうか。

里香のクラスメイトでない、と断言できる証拠はない。でも、それはとても少ないように思えた。何回かアリスの劇の練習を見に行っていたことがあるけれど、クラス全体が和気藹々としていて、本当に楽しそうだったのだ。あの子たちの中に、大切な衣装を隠してしまう人間がいるとは思えなかった。

とすると、いったい誰なのだろうか。他のクラスのやつが妨害として？

僕の学校の文化祭では、各団体の出し物の中から各種の賞が選ばれる。食品団体、公演団体など、ジャンル別に選ばれる賞もあるけれど、一番名誉のある賞が最優秀賞だ。

これは校内の全ての団体からひとつだけが選ばれる。つまり、その年の文化祭で最も素晴らしかったクラスに贈られるのだ。三年生になるとこの賞への意識が高まる。毎年、公演団体が選ばれる可能性が高いから、里香のクラスが他のクラスから妨害を受けたと考えると、なんだかそんな気もしてくる。

けれど。

それは本当に悲しいことだ。

そんなことが起こってしまうこの世界が、本当に悲しい。

里香は今までずっと病室で生活してきて、外の暮らしにやっと慣れてきた。彼女にとっては毎日が発見の連続で、きっと世界の美しい部分ばかりを見てきた。僕はそれが本当に素晴らしいことだと思っていた。できることなら、このまま里香には穢れのない世界の陽の当たる部分だけを歩いて行って欲しかった。

それは僕のエゴだった。里香が退院して、一緒に学校に通うようになって、なるべく世界のきれいな部分だけを彼女に見せようと僕は必死だった。口に出して里香に言ったことはないけれど、僕は無意識の内にそういった行動を取っていた。

今思うと、それは間違っていたのかもしれない。いや、それを理想として目指すことは悪いことじゃないと思う。ただ、僕がしてきたことは、里香に嫌なものを見せないようにしてきたことは、間違いなのだ。パンクしたタイヤのまま自転車を漕いでいるように。僕は里香を騙し続けてきたのかもしれないのだ。

世界は、思うほど優しくはないし、きれいでもない。

幽霊なんかよりも、人間のほうが、よっぽど怖いんだ。

でも、優しい部分やきれいな部分があるから、そこだけを里香に見せたかった。だから、今回のことは僕にも責任がある。

あんなにも取り乱した里香は見たことがなかった。自分たちの大切なものが盗まれてしまう。盗んでしまう人間がいるのだ、ということが信じられなかったのだろう。

僕は足に力を込める。走った。男子トイレや更衣室、体育倉庫、探せる場所はすべて探した。けれど、見つからなかった。

里香……。

時間はすでに放課後になっていた。夕暮れの橙が空を埋めている。

結局、アリスの衣装は見つからず、けれど里香に会おうと思ってクラスに行くと、そこにはなんとアリスの衣装があった。

机の上に無造作に置かれたエプロンドレスは、以前に里香が着て見せてくれたときとは比べものにならないほど汚れていた。ところどころ擦り切れていて、このまま着ることなんてできないだろう。

「裕一……」

僕に気づいた里香が、弱々しく口を開いた。

「どうしよう、裕一……衣装、こんなにボロボロで……」

里香の友達が説明してくれた。衣装はゴミ捨て場にあったらしい。ご丁寧にゴミ袋の中にあったのだそうだ。

あちこち汚れていたり切れていたりして、修復するにはかなりの時間がかかるだろうことは、素人目にもわかる。

「みよちゃんがせっかく作ってくれたのに……」

名前を呼ばれた、みよちゃんという子が、口に手をあてた。目が潤んでいた。

里香は俯いて、アリスの衣装をじっと眺めていた。僕も少しのあいだ、そうすることしかできなかった。周りの里香のクラスメイトたちも、じっと動けずにいた。時計の針が進む音と、他のクラスが準備の最終段階に取り掛かっている声だけが聞こえていた。

どこの誰がこんなひどいことをしたのかわからない。

けれど、ドレスはぼろぼろで、里香が泣いている。

それは紛れもない事実で。

僕は、里香の涙をぬぐってあげたいと思った。

だから。

「里香」

そう声をかける。

「オレがなんとかするよ。だからさ……」

里香は僕のことをじっと見つめた。目から溢れそうなほどに溜まった涙が、そのぷっくりとした頬を伝ってしまう前に、

「だから、泣かないでくれよ」

里香。

僕は、そう言った。

そう言ったはいいものの。

両手の上でくたびれているアリスの衣装に視線を落として、ため息をつく。

「どうするかなあ」

とぼとぼとすっかり暗くなった帰り道を一人で歩く。

里香のクラスの面々には、僕がなんとかして衣装を直すから、教室の装飾をするように伝えたのだった。衣装探しに手いっぱい、部屋の装飾がいっさい進んでいなかったからだ。

常識で考えれば、裁縫の得意な女の子が二週間もかけて作った衣装を、素人の僕が夜なべしてどうこうできるはずがない。けれど、あのクラスの後輩たちは、僕の目を見てしっかりと頷いたのだ。お願いします、とそう言ってくれたのだ。

その期待に応えなくてはいけない。

おそらく、明日になって僕がアリスの衣装を直せなかったとしても、誰も僕を責めはしないだろう。

でも……。

だからこそ。

みんなの笑顔を守りたい。

いや、そんな大それたことじゃないんだ。

ただ、僕は。

里香に笑っていて貰いたい。

それだけなんだ。

ポケットに入った携帯電話を取り出す。

入院時代から変えていない、今ではだいぶ古いモデルになってしまった、僕の携帯電話。

また少し力を貸して欲しい。僕一人でなんとかすることなんて、きっと無理だから。

人間は支え合って生きている、だなんて言ってしまうばかりいいけれど、一人じゃなにも出来ないのが人間なんだ。

だけど、それが悪いとは思わない。誰かに頼って、頼られて、そうやって生きていくんだろう。

何度目かのコールで懐かしい声が聞こえた。

どこから説明しようか迷いながら、僕は口を開く。

「もしもし、司か？」

ジュース一本をおごる程度じゃ済まされないだろうな、なんてことを考えながら、司の家に向かって僕は走り出した。

時計の針が十時を指した。文化祭校内発表の始まりが放送によって告げられる。

僕はクラスみんなに謝って、里香のクラスの『不思議の国のアリス』の一回目の公演を見に来ていた。

まだお客の入りは多くはない。他の団体はどこも売り物をいかに売るかといったことに苦戦している。ちなみに、公演団体に十時から発表を行うのは里香のクラスだけだった。他の公演団体は三学年が多いから、時間がかぶると集客数が減ってしまうの、と里香は言っていたけれど、それをきちんと実行してしまうのはすごいことだと思う。

口コミで広まっていたのか、それでも開演に近づくにつれて室内は観客で溢れてきた。

ステージに向かってちょうど左側に数人の三年生が陣取っていた。

隣のクラスの女子たちだ。顔は見たことがある。

明らかに周りとは違う雰囲気を受けるグループだ。

他の生徒たちはみんな、劇を楽しみにしているのに、あそこの女子だけが違っている。どこか嘲りを浮かべているのだった。

もしかして。

そんなことが脳裏をよぎる。

あの女子グループがアリスの衣装を隠した犯人なのだろうか。それは憶測にしかすぎないし、疑い出したらきりがないのはわかっている。

でも、なんとなく。

なんとなくそんな気がしたのだ。

その衣装を隠した犯人がわざわざ劇を見に来た理由はなんだろうかと僕は考える。

上演中止になるのを見物しに来たのだろうか。

今のところ、予定通りに不思議の国のアリスは行われる、と発表されているけれど、彼女たちはそれを信じていないように見える。

そんな僕の下らない想像をかき消すように、教室の照明が前ぶれもなく落とされる。

あちこちで歓声があがり、ステージにだけライトが当てられる。

開演だ。

アリスの役は一番出番が多い。原作とは少しアレンジしているそうだが、それでも殆ど出ずっぱりだろう。

もしも、そんなにも重要な役がぼろぼろの衣装で登場したら……。見ているほうもいたたまれなくなってしまう。

あの女子グループが犯人でないとして。この中に真犯人がいて、そのぼろぼろのアリスを見物して笑い転げたいのなら。

それは、失敗に終わる。

壇上にアリスが現れた。

秋空のように澄んだ青を基調としたエプロンドレス。白いフリルがライトに照らされて揺れる

。

周囲の生徒たちにどよめきが起こる。

きれいだ。

率直にそう感じた。

アリスの衣装は僕と司、それから山西にも手伝ってもらって徹夜でなんとか修復したのだった

。

そのおかげで僕は昨日から一睡もしていないし、慣れない針仕事に両手の指は絆創膏だらけだった。

でも、僕たちにしては頑張ったほうだと思う。

近づいてみると素人の補修だとばれてしまうが、暗い室内で、ある程度ステージから客席が離れているのが功を奏した。遠くからならとても素晴らしい衣装に見える。

一步。

里香が歩くたびに黒い髪の毛が舞う。閉じられた瞼から伸びるまつ毛が、照明に踊る。

そして、里香が――。

――アリスが顔を上げ、両目を開いた。

刹那、僕と視線があう。

里香もそれに気がついたはずだ。むしろ、初めから僕がここにいるということを知っていたとでもいうように。

僕はアリスの衣装に身を包んだ彼女を見つめる。

里香も僕をじっと見つめて、そして……。

里香はにこりと微笑んだ。

おお！ と観客がわいた。しかし、その笑顔は、里香を見ている全体に向けられたものではない。

僕という一人の人間に対して向けられた、とびきりの笑顔だった。

里香の唇が音もなく、小さく動くのが見えた。

『ありがとう』

そう、聞こえた気がした。

僕は急いでカメラを構えた。僕だけに向けられた、里香の最高の笑顔を撮ろうと思った。

けれど、ファインダーをのぞくと里香はくるりと髪をひるがえして、ステージを目指してゆったりと歩を進め出してしまう。

もう僕を見つめることなんてしない。

里香は今、アリスになったのだから。

先ほどの女子グループは、白けたような雰囲気ですテージを眺めている。きっとあいつらが衣装を隠したのだ。文化祭の賞がそれほどまでに欲しいのかと思ったけれど、思い出を作るのに彼女たちも必死だったのかもしれない。

これから先、こういったことは里香と僕のあいだにたくさん起こるだろう。

悲しいけれど、それが生きていくということなのかもしれない。

なるべく里香には世界のきれいな部分だけを見て生きて行って欲しいけれど、そうやって暗がり避けて歩いて行くのも限界があるだろう。

だから。

だから僕は、もしも日の当たらない道に里香が入ってしまっても、彼女が迷わないように、きちんと光のさす道へ戻って来られるように、手をしっかりと握って一緒に歩いていこうと思うのだ。

不思議の国に迷い込んだアリスみたいに、僕らはこの世界であてもなく歩いて行く。

辛いことや悲しいことがあっても、最後はハッピーエンドだったら、僕はそれでいいと思う。そんな物語を紡ぐことができたなら、里香は笑ってくれると思うから。

里香がステージの真ん中で動きを止める。

辺りがさっと静かになる。どよめきも歓声もやんで、照明に照らされた里香に視線が注がれる。

すっと息を吸う音が聞こえた。

僕にはそれが、役に命を吹き込むみたいに思えた。

里香の可愛らしい唇が動く。

僕は、必死にカメラのシャッターを押した。

『不思議の国のアリス』が、始まる。

おわり